

テレホン法話

郡上市念興寺 毛利智見

十一月二十八日は、宗祖親鸞聖人の祥月命日です。そのご命日を縁として、京都の本山・東本願寺では、二十一日から二十八日までの七昼夜、親鸞聖人の遺徳を偲び、仏恩に感謝する報恩講が勤まります。また、本山の報恩講に前後して、各お寺では、お取越しと呼ばれる報恩講が勤まり、岐阜東別院でも、十二月八日から十一日まで勤められます。真宗門徒の一年のたしなみとして、是非、報恩講にお参りしたいものです。

さて、その親鸞聖人のご命日である十一月二十八日の翌日、十一月二十九日は、私事ではありますが、私にとって特に大切な一日であります。その日は、私の実の兄の命日であります。二年前の十一月二十九日の未明、兄は病気により、五十六歳という若さでお浄土へと還りました。両親はいまだ健在です。その両親よりも兄が早く逝ったことで、まさに蓮如上人がお示しくださった「老少不定」、老いも若きも定めがない、というお言葉が心にしみます。

その蓮如上人のお作りになった「御文」の第四帖第九通目に、「疫癘の御文」というのがあります。そこには、「最近、多くの人々が病気になって次々と亡くなっていくけれども、それは、病気によってはじめて死んでいくのではなく、その原因は、あくまで生まれたことによるものなのだ」と、説かれています。つまり、人は、病気だとか、交通事故だとか、あるいは老衰で死んでいくとか、そのようによく言われますが、それはどこまでも縁、ご縁が催したことによるものであって、もともとの原因を辿っていくと、それは、生まれたことによるのだということです。

人間は、生まれた限りは必ず死ななければなりません。百人いれば百人が死に、しかも、その日がいつなのか誰にも分かりませんし、年寄りが先で若者が後だなんてことも分かりません。また、大切な人だ、愛しい人だと言っても、いつ別れの日がやって来るかも分かりません。

そのことを、約二千五百年前に、お釈迦さまは、「諸行無常」と説かれました。諸行無常とは、人間の世界には久しく留まるべきものは何もないということです。

兄の死は、まさに、毎日の生活を当たり前のよう過ぎしている私に、そのような毎日が、ずっといつまでも続く保証など、どこにもないという現実を、死ぬという形を通して厳しく教えてくださっています。

時折、高山の実家に帰って兄の遺影に向き合うとき、兄は仏さまとして私に語りかけてきます。

「おまえ、今をちゃんと大事に生きとるか？ いずれ死ぬ身やぞ、諸行無常やぞ」と。